

近代文学 1

黎明期の近代文学

有斐閣双書

近代文学 1

黎明期の近代文学

三好行雄 編
竹盛天雄



* 入門・基礎知識編 *

有斐閣双書

編 者 紹 介

み よし ゆき お
三 好 行 雄

大正15年生れ。昭和25年東京大学文学部卒業。

現 在 東京大学文学部教授。

たけ もり てん ゆう
竹 盛 天 雄

昭和3年生れ。昭和27年早稲田大学文学部卒業。

現 在 早稲田大学文学部教授。



有斐閣双書

近代文学 1 黎明期の近代文学

昭和53年3月10日 初版第1刷印刷

昭和53年3月20日 初版第1刷発行

編 者	三 好 行 雄 竹 盛 天 雄
-----	--------------------

発 行 者	え ぐさ ただ あつ 江 草 忠 允
-------	-----------------------

東京都千代田区神田神保町2～17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1311(大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 理想社印刷・製本 稲村製本

©1978, 三好行雄・竹盛天雄. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★ 定価は外函に表示してあります

はしがき

最近の近代文学研究の盛行はまことにめざましく、卒業論文の段階でも、いささか比重を失した近代への傾斜がいわれはじめてからすでに久しい。小説家や批評家など、文壇サイドからの発言もめだつた現象となりつつある。近代文学が一箇の文学伝統として、《現代》を架けて問うに足る意味をようやく瞭然としてきたのであろうか。古典文学からの相対的独立の問題をはじめ、近代文学史観の再検討、実証と論理の亀裂をめぐる方法論の再構築、新しい言語理論による表現構造論の要請など、刻下の研究者に強いられている重要な課題も多い。文学自体の概念の拡張によって、思想や政治の領域も、いやおうなく文学史（文学研究）の対象と化しつつある。

総じて、戦後に本格化した近代文学研究も三〇年を経て、明らかに重大な転換点を迎えたつある。それは研究方法の多岐な分化と混乱、研究領域の拡大と多彩化などをともなう、ひとを一種の迷路に踏みまよわせる観さえある。迷路は、月々に量産される膨大な研究論文の数によっても象徴される。とくに研究の第一歩を踏み

だそうとする人びとにとって、氾濫する情報の渦は時として、いたずらな混乱と徒勞を強いるだけであらうし、ことは学生を指導する立場の教師にとっても同断である。

こうした時機に、評論と研究とをあわせて過去の龐大な業績に史的整理をあたえ、その到達点と残された問題を明らかにすることは、旧来の水準を越えて、近代文学研究の新たな発展と飛躍をうながすためにも必須の課題だといえよう。本シリーズは、そうした要請に応えるものとして企画されたが、従来の類書が多く踏襲してきた作家別（ないし作品別）の展望に終始することを避け、ひろく近代文学研究上の核心となるべき問題点を選択し、個々のテーマに応じた史的整理を試みている。テーマの選択は研究者の関心が深く、したがって業績の積みかさねの多い問題を主とし、同時に、研究の進展に即応した新しい課題にも留意した。個々の叙述は原則として、(一)問題の所在、(二)主要な研究業績の史的整理、(三)今後の課題・方向の指示の三点を骨子としたが、テーマによっては、それによりふさわしい叙述がなされた場合もある。

全一〇巻の構成は小説・評論を中心に、ほぼ時代の流れに沿って区分した第1、7巻と、近代および現代の詩歌を対象とする第8、9巻、研究上の重要な主題と方

法を展望した第10巻からなる。現段階で、必要な問題点はおおむね網羅したと信じるが、幸いに、多くのすぐれた研究者の協力を得て、所期の目的を充分に達しえたと自負している。

本シリーズの刊行が研究者、あるいは研究をこころざす人びとへの指針を提供し、そしてまた、ひろく近代文学の読者にとっても鑑賞・享受の一助となりうることを期待したい。最後に、編集から刊行までの過程で、有斐閣編集部の澤井洋紀・千葉美代子・林喜代子の諸氏に多大の援助を受けた。記して謝意を表する。

昭和五二年五月

三好 行雄
竹盛 天雄

*執筆者紹介

(執筆順)

あさ い きよし
浅 井 清
は せ がわ いずみ
長谷川 泉
ひら やま じよう 児
平 山 城 ね
こ いけ まき たね
小池 正 胤
やま しき かず お
山 敷 和 男
のぶ ひろ しん 治
延 広 真 治
おき つ かなめ
興 津 要
なか しま ひこ
中 島 国彦
ひろた まさ き
かめ い しゆん すけ
亀 井 俊 介
やま もと しよう いち
山 本 昌 一
の やま か しよう
野 山 嘉 正
あす か い まさみち
飛鳥 井 雅 道
やぶ てい こ
敷 禎 子
なか むら かん
中 村 完
おか やす お
岡 保 生
か べ よし たか
嘉 部 隆
ち ば せん いち
千 葉 宣 一

お茶の水女子大学文教育学部教授

学習院大学文学部講師

立教大学一般教養部教授

東京学芸大学助教授

早稲田大学文学部講師

東京大学教養学部助教授

早稲田大学教育学部教授

早稲田大学文学部専任講師

岡山大学法文学部助教授

東京大学教養学部教授

国士館大学文学部講師

山梨大学教育学部助教授

京都大学人文科学研究所助教授

藤女子短期大学教授

成城大学短期大学部教授

青山学院大学文学部教授

大阪樟蔭女子大学学芸学部教授

帯広畜産大学教授

目次

はしがき

1 近世から近代へ

- 視点の問題(1) 維新史研究の新局面(3) 近代化論の登場(5)
 近代への胎動と近世の終焉(7) 今後の課題(10) 浅井 清 1

2 日本の近代化と文学

- 近代の構造とその起点(11) 封建性打破の日本的構造(12) 天明のプレ・ロマンティズムの継承(14) 個と集団と民族と——帰属(16) 近代化の起点を求めての模索(17) 文学と相結ぶ場において(19) 西欧的近代につきつける七首と自己矛盾(20) 長谷川 泉 11

3 国学と近代文学

- 久松潜一の『国学』(22) 久松・風巻の論争(23) 国学と関連のある近代作品(25) 折口民俗学と国学(26) 柳田民族学と国学(27) 日本浪漫派と国学(27) 保田与重郎の評価(29) 竹内好の指摘(30) 「国 平山 城児 22

学」への眼(31)

4

儒学と近代文学

.....小池 正胤 33

「儒学」とは(33) 「舞姫」と近世文学・中国文学(35) 明治初期の啓蒙思想と儒学(36) 明治初期文人と漢詩文(39) 河上徹太郎『吉田松陰』と中村真一郎『頼山陽とその時代』(41)

5

『東京新誌』と撫松

.....山敷 和男 44

撫松の前半生(44) 撫松の文壇登場(45) 『東京新誌』の創刊(46) 『東京新誌』発刊の目的(47) 『東京新誌』の本領(1)——撫松の文章(48) 『東京新誌』の本領(2)——反官僚的態度(50) 『東京新誌』のその他の面(51) その他の戯文とその後の撫松(52)

6

円朝・その芸と文学

.....延広 真治 54

芝居咄の人気者(54) 物語作者の誕生(55) 素咄への転向(57) 欧州小説への興味(59) 速記術の普及と言及一致(61) 歌舞伎の素材として(68) 無舌居士と日蓮宗(70)

7

文明開化と戯作

.....興津 要 72

幕末戯作に見る文明開化(72) 明治開化期の戯作(73) 魯文作品の流行

(75)	反開化的戯作 (77)	「三条の教憲」と戯作界 (79)	すすむべき 方向 (80)
------	-------------	------------------	------------------

8	戯作の可能性	中島 国彦	82
---	--------	-------	----

戯作の持つ両義性 (82)	再評価への胎動 (83)	戯作伝統への照明 (84)
戯作精神の意味づけ (86)	一つの転換——明治初期戯作の再評価 (87)	
多様化の中における戯作研究の新段階 (88)	一つのアポリア (91)	

9	初期啓蒙思想の性格	ひろたまさき	92
---	-----------	--------	----

初期啓蒙思想の展開 (92)	啓蒙思想研究の戦前における成果 (94)	戦後 民主化と啓蒙思想研究 (97)	産業近代化論と民衆思想史 (99)	今後の課 題 (101)
----------------	----------------------	-----------------------	-------------------	-----------------

10	『西国立志編』の世界	亀井 俊介	104
----	------------	-------	-----

『西国立志編』の成立 (104)	『西国立志編』の内容 (106)	『西国立志編』 の受容 (110)	『西国立志編』の影響 (112)	『西国立志編』時代の終焉 (115)
------------------	------------------	----------------------	------------------	--------------------

11	福沢諭吉の近代	山本 昌一	117
----	---------	-------	-----

近代思想家諭吉 (117)	同時代人の諭吉観 (118)	隠れた諭吉崇拜 (119)
---------------	----------------	---------------

「小説神髓」のリアリズム

.....中村 完

「経国美談」の評価

.....藪 禎子

政治小説の命脈

.....飛鳥井雅道

『福翁自伝』の文体

.....野山 嘉正

明治二〇年代の論吉批判 (120) 桂月・樗牛等の論吉批判 (122) 王堂の
『福沢諭吉』 (123) 論吉論——大正から昭和へ (123) 戦後の論吉研究 (124)
これからの課題——トータルな論吉論 (126)

『福翁自伝』の成立 (128) 『福翁自伝』の位置 (130) 尾崎三良の自伝 (131)
柳北と諭吉 (132) 『福翁自伝』の発想 (134) 『福翁自伝』の文体 (136)
自伝研究の意義 (138)

文学としての異質性 (139) 研究の出发点——柳田泉 (142) 国民文学論の
直後に (142) 異質性の確認 (143) 研究の深まりと問題点 (145)

「経国美談」の位置 (149) 退色化の過程 (150) 政治小説への関心——柳
田泉など (151) 戦後の評価 (1)——猪野謙二 (152) 戦後の評価 (2)——小
田切秀雄 (154) 戦後の評価 (3)——中村光夫 (154) 戦後の評価 (4)——飛
鳥井雅道 (156) 現状と今後の課題 (157)

18	17	16
進化論と文学……………千葉 宣一	〈改良〉の時代……………嘉部 嘉隆	「当世書生気質」の意味……………岡 保生
192	182	171
近代文学史の断層・破砕帯 (192)	〈改良〉の時代 (182)	最初の近代文学論 (160)
日本における進化論事始 (195)	〈改良〉と革新の間 (183)	リアリズムと〈没理想〉 (161)
Evolution の訳語を巡って (198)	「明治文化研究会」の役割 (184)	リアリズム再検討と明治文学回顧 (162)
Spain	文学改良運動の範囲と柳田泉の立場 (185)	文学史叙述への定礎 (163)
	柳田泉の足跡 (186)	「小説神髓」研究の進展 (163)
	もう一つの文学改良運動 (188)	「小説神髓」研究の本格化 (164)
	柳田泉『明治文学研究』の意味 (189)	リアリズム論の二重構造 (166)
	さまざまな視点 (189)	〈没理想〉の現代的意義 (168)
	残された問題点 (191)	
	近代的と前近代的と (171)	
	注目すべき同時代評 (173)	
	再検討の機運——	
	神代種亮と小島政二郎 (174)	
	その進歩的意義——柳田泉・本間久雄・服部嘉香など (176)	
	その内面的意義——戦後の業績一瞥 (178)	
	小説家逍遙の道 (180)	

サー主義の影響 (199)

ダーウィニズムの影響 (201)

残された課題 (202)

『近代文学』全一〇巻総目次――
204

1 近世から近代へ

視点の問題

「近世から近代へ」というテーマは、ひとつの転換期における文学史上のさまざまな問題を内包する。この場合、それは近代日本の基盤とその成立過程を、政治・経済・社会・文化等の各方面から解明しつつその総合的考察から提起されるものである。当然そこには文学研究上の到達点と問題提起の整理にとどまらず、歴史や思想史などの隣接諸科学の成果を全体の視野の中に収めながら、研究動向の焦点を見定めていくことが必要となってくる。それは筆者の能力を越えた拡がりと深まりを持つてくるので、ここでは与えられたテーマに添いつつ、筆者の関心に即しながら管見に入りえた範囲で問題点の所在と背景について述べていくことをあらかじめお断りしておきたい。

「近世から近代へ」という問題はいろいろな角度から取り上げることが可能である。

たとえば、矢田挿雲に倣って言えば、「江戸から東京へ」というやや郷愁のこめられたテーマとなる。この場合は、都市化に伴う地誌的变化や生活環境の変化をとらえながら、おのずと風俗や生活習慣の移り変わりに焦点がおかれ、失われていったものを浮き彫りにする回顧的な姿勢が顕著になってくる。またそこから反転して近代の光と影を逆照射することも可能となってくるのである。

時代の風潮をスローガンのにとらえると、「尊皇攘夷から文明開化へ」ということになるのか。さまざまな人間の思想と行動のドラマを軸にして、幕藩体制下の政治的情況や、封建的生産様式から資本主

義的生産様式への移行過程が当時の国際情勢を背景に解明されて、その経緯は現代的評価が加えられなくてはならない。いわば尊皇攘夷から開国和親、さらにその結果としての文明開化に至るまでの悲喜劇を通して、日本近代の正負がそこに論じられてくるのである。それは、ヨーロッパ史から抽出されて理論化された歴史発展の一般的法則との比較による日本の特質の正負を検討するという傾向を少なからず持っていたのである。

またここ数十年余りの間に、主として積極的な発言をしてきた英語圏の研究者に即してみると、このテーマは《From Early Modern to Modern》とでもなるだろうか。もちろんこのナンセンスな直訳では、テーマの本来持っている熾烈な対立、抵抗の過程はいうまでもなく、郷愁や情趣の質的差異をも、字句の表現から後退してくる印象を残す。だから彼らにとって、たとえば《From 1853 to 1889》であり、《Modernization in Japan》である方が、彼らの関心とその方向性をより明確にし得るとしたものである。そし

て彼らの言う日本の近代化は、いわゆる西欧以外で成功した西欧型近代化の唯一の例として、モデル化されてくるのである。

最近の研究は、このように多角的な視点が交錯しながら、その相互の批判・再批判を通して進められているのが現状である。その研究の対象としている時代はおおむね一九世紀の日本であり、遡っても一八世紀後半からの約一五〇年間である。問題はこれらの政治的・経済的・社会的・文化的状況の変化を、鎖国体制の内部矛盾の露呈としてとらえるか、近代化への潜在的エネルギーの蓄積過程としてとらえるか、という差異にある。加えて西欧の衝撃をどうとらえ、いかに評価していくのかという問題に焦点が合わされてくると、またそこが論の分かれるところである。このことはとりもなおさず明治維新の位置づけやその評価にもからんでくるし、維新後の社会構造や政治体制の分析にも、また西欧文化の受容と伝統文化の変容過程の解明にも関わってくる問題である。文学研究においてもそれは例外ではない。三

1 近世から近代へ

好行雄は「西洋を基準とする『近代』と、そのあわただしい受容が逆照射した『反近代』とを同時に見とおす複眼を手に入れることなしに——言葉をかえていえば、文学史の評価基準を文学史の外にはなく内から発見しなければ、日本の近代文学史は正當に評価できないだろう」(『日本文学の近代と反近代』あとがき)昭47・9、東京大学出版会)と述べているが、「近世から近代へ」の過程には、まさにその近代的なものと反近代的なものが、対立し重層して渦巻いているのである。その内実を検証し考察することから、近代文学史の第一歩が始まることになる。

維新史研究の新局面

日本の近代文学は明治維新以後に置かれるのが通説であるが、それは近世文学との断絶の上に成立したものでないことはいうまでもない。近世的なものとの連続と非連続の重層した流れの中で変容していったものである。その変容過程の解明を通して独自の性格が見出されてくるのである。

文学の流れを文化史の一環としてとらえようとす

るならば、まずその基盤としての政治的・経済的・社会的発展過程の研究との関連において把握していく必要が生じてくる。そこで「近世から近代へ」という転換期の文学的動向を考える際、歴史学と思想史の研究成果として、大きな影響を残したと思われるのが、遠山茂樹『明治維新』(昭26・2、のち改訂、昭47・4、岩波書店)、井上清『日本現代史Ⅰ 明治維新』(昭26・10、東京大学出版会)と丸山真男『開国』(現代倫理11、昭34・1、筑摩書房)であろう。

前二著は、戦後の明治維新研究の大枠と方向を定めたと言われるものである。遠山茂樹は明治維新の主要因を国内的契機に求めて、階級闘争の集中表現としての天皇制絶対主義の成立過程に置いた。これに対して井上清は、国際的契機を重視して、当時の半植民地化の危機意識を背景に、階級闘争の激化を経て民族的独立に至る達成過程において、これをとらえたのである。いうまでもなく両者の論争点は、戦前の服部之総と羽仁五郎の対立の延長線上にあった。丸山真男の『開国』は、異質な文化受容を可能

とした伝統的思想の分析と、その自覚的対応の論理を解明し、開国の深層にある価値意識の特色を検討した。いわば幕末維新期の政治的情況を貫くその問題意識の鋭さによって、鎖国社会およびその国際化の正当性が論証されたのである。この三つの労作の示す論点と方向とが、「近世から近代」という転換期研究の大きな枠組みと問題提起とをなしてきたのである。

ところで遠山の『明治維新』は、天保期に明治維新史の起点を置いた旧版の見解を修正し、改訂版では天保期には明治維新の政治的原型の形成への動きがあったとし、これが明確な形で成立するのがベリ―来航以後の安政年間であるとした。この改訂の理由として〈明治維新史をもって、世界資本主義体制の一環に組みこまれることによって、促進されかつ規制された絶対主義の成立過程と理解する立場〉をとることを挙げている。ということは明治維新を囲む国際情勢——一九世紀後半の世界史のあるいは東アジア的観点の積極的導入によって、維新史研究の

飛躍的發展が始まったことを意味する。

このような国際的契機を国内的契機に密接に相關させていく新しい研究方向が強まったのは、一九六〇年代からである。その傾向を代表するのが「歴史学研究会」の大会報告での、芝原拓自の「明治維新の世界史的位位置」である。芝原は、一九世紀後半での日本の選択は半植民地化か西欧の従属資本主義化の二者択一しか残されていなかったとした。後者を選んだ維新変革の過程は半植民地化の危機を脱して民族の独立を守りえた反面、その必然として国際的には西欧資本主義との対立と侵略性を内包することになったとする。芝原はこの世界史的規定性に立って、日本資本主義の基本的矛盾と維新変革の階級的特質を説明していこうとするもので、その論の展開は「開国」（『日本の歴史』23、昭50・12、小学館）、『世界史のなかの明治維新』（昭52・5、岩波書店）で具体化されている。これに対して遠山は東アジア地域史という新たな観点から芝原に批判を加え、両者の間で論争が交された。その論争を踏まえその後の研究